瀧のやどり

年頃病める身を助けて、鶴崎の廬に月日を送りけるを、今茲文化の四とせ神無月の初め八日に、観海寺の温泉に浴みせんとて出立つ。佐藤逸が久しく物学びに来りて留り居りしも、其故郷に帰るとて相伴ひぬ。

口號

辭官養病久閑眠　江梅棲遅欲二十年一　難邦膏盲醫未得
又尋二靈窟一浴二温泉一

暁方に乙津の渡りに来りて舟を呼ぶに、應だにせず。

舟まとふ渚に寄する白波の
おとづは人のおとずれもせず

朝起探二奇跡一　堤松散二曙鴉一　津人呼不レ寐　躑躅倚東涯

辛じて出来りて渡しぬ。高松に至りぬれば、日も華かにさし渡りて冬の空ともいはれず。最と暖かなり。

朝日影のぼるにつれて高松の
もみぢぬ色はあらはれにけり

萩原になりぬ。

咲匂ふ花も残らぬ冬枯れに
露むすぼるゝ萩原の里

坊が小路の板橋三百尺ばかりなるを渡るにつけて、この川筋の屡々かはりぬることなどおもひて、

我見ても三たび移れる川水の
流れての世はいかにならまし

府内に至る。この君政事に深く心をよせられけるを、近き頃東の旅にて蔭れましぬと國人の歎くよしを聞て、

諸人の涙やかくは染ぬらん
ちしほ色濃き木々のもみぢ葉

池の汀の紅葉のいと麗はしきが水底まで照りたる。言ん方なし。

影うつす梢の色はさながらの
錦を洗ふ池のさゞ波

春日の社の邊に出ぬ。此に蓬莱と呼ぶ所あり。亀の形にやと覚ゆる芝山を造れるなり。傍に石碑を建たり。文字の消えてその由を知らざれど、最愛づらかなる名なりけり。庭造る工の之を見て殊に愛でけるとか聞へし。

浪荒らき八重の潮路を分もせで
蓬が島に我は来にけり

生石の濱の北方に小島と云ふあり。笠結といふ名をおふせたれど　餘りに細ければ覚束なし。笠結は早く海となりしにこそ。

海原となりにし跡の白波に
昔を忍ぶ笠ゆひの島

高崎山を過ぎぬ。こゝは四極の名をおふせたり。誠にしかいふべき山なり。中頃城ありし所にて、麓の小道僅かに足を入るゝばかりなりしを、やうやう安らけく作りなしぬ。されど猶たぐひ少なき阻傳ひなり。

四極山腰路　従来纖似糸　清時不恃険　漸見就平夷

濱脇村に到りぬれは、けふは神の祭とて人立騒ぐ。別府の濱に幸などいふことあり。この畔も湯夥多出で、すべて賑はへる所がらなり。

こゝもまた温泉につれて旅人の
いとゞ寄来る浦のしら浪

濱脇と別府の境に沿て、立石山へと志して登る。朝見村の真光寺といふ前を過ぐ。昔相識たる僧を懐出て訪ふに、今は異寺に住るよしにて、ここには長門の僧徹叟とかいへるが在けるが　予が名を知つて懇に物語し、自ら出て山路を導きて別れぬ。険しき道どもを越ぬれば、身疲れ足たゆみて行なやみ、めぐりめぐりて観海寺の温泉の許に出ぬ。

天地の自づからなる湯の下に
　身の病気をいざそゝがなん

瀧の下なる宿に舎りぬ。

夜もすがら夢も結ばず敷妙の
　枕にひゞ瀧津瀬の音

夜深く海原を見渡しぬれば、晴る夜の星かと詠しも思合さる。

立出て見れば汐路の遠方に
　あはれをよそふ蜑のいさり火

暁にゆあみすとて、

鶏も居ず鐘も聞えぬ山里の
　ほのぼの白むしのゝめの空

佐藤逸がこゝより帰るを見送りて、

霞たち花さく春は逢ふべきを
　猶も別れのおしまれぞする

題「観海寺湯泉」

絶境重「游日」題名存不存　飛降九條瀧　澄湛一泓温
地脈通「喬嶽」戦圖餘「曠原」依然滄海色　渺々浸「乾坤」

そも此所は鶴見嶽の麓にて、山を負ひ海を抱き、伊豫

路を前に望み、右は海部大分の郡の浦々。左は国東速見の郡の隈隈より、近くは石垣原を目の下に見下し、最曠れやかなる所なるに、湯は名に高き湯の平に並び、味ひ甘く色濃く、萬の病に験あれば、四方の人来り集ふこと春秋をもてさかりなりとす。

瀧は初めこの湯の許の岸に細き流れを引て落せるを、旅衣の雨にそばち日に曝して濯ぎける十とせ餘りにやなりぬらん。乙津の無参居士諸人の為にとて山岸に石垣を築き、其の上と下に大なる石のふぬを設けて、上なるは流れ来る湯を蓄へ、下なるは瀧を受けて、人々の居ながらに心のまゝにそゝがるべくたくみ、石垣の巓に穴を穿ち、九條の細き瀧を落して常に絶へず。それに瓦葺の屋根をおひ、石の柱をつぎて雨を凌ぎ日を支へ、朽せず傾かぬ設けを為せば、いよいよ名に高き湯とはなりにき。

我がむかし来り見し時とは事替りて、舎の家々も作り改めて　山の中ともとはず住なせり。この頃は浴みする人皆帰りぬとて静かなれば、我為にはいとよき隠家にて、瀧の下の舎り心のどめきぬ。

小山田に残る遅稲の色見へて
今しも秋の心地こそすれ

かくてこそ住むべきものを柴の戸に
ひとり深山の木隠れの月

をりをりに時雨とぞ思ふ瀧津瀬の
響をそふる山下の風

さす月の影さへ澄て湯の下は
冬とも分かぬ景色なりけり

この里より遠からぬ古市に相知れる人あるが来りて、湯の傍の宿りに居て夜昼語り合ひ、物など送るに旅の徒然をも忘れ、日に六度七度浴みし、瀧に打たれ、夜も再び三度ゆきかふ。

登「観海寺」鎖戸因賦

観海危臺此再攀　禅房寂聞薜蘿關　徘徊誰話曾游跡

唯有霜楓照客顔

分け入し木の下路に散しける
紅葉の錦ふまゝくもをし

夕風に野邊の尾花の浪よるは
海みる山のしるしなるらん

浴みしながら伊豫の國を望みて、道後の湯は此の速見の郡の湯を分ちたりなどいふことを懐出て、

隔ててもなお睦しき心地して
伊豫の湯桁もたどられにけり

暁方寒かりければ、

草枕ふす猪の床も遠からで
露さえわたる暁の風

立石よりふる里人の許へ、使につけて楓の枝をつかわすとて書そへたる。

着てかへる時しなければ故里に
紅葉の錦包みてぞやる

早起浴温泉

起瞻暁星爛　東方海色生　歩履度苔径　臨甃試湯泓　和暖於我適　澄潔何盈々　潅浴自呼快　消息或倚楹　不知患痾宿　正覚身肢軽　松際丹霞抹　漸見群山明

みわたせば雲井をひたすはやすひの
海より出る朝日かげかも

夜いと寒かりければ、

さゆる夜の枕の上におもふなり
いかにふりつむ峯の白雪

偶　成

浴罷單衣歩去遲　朗吟山館幾篇詩　宛然猶似雲臺興
正是小春晴暖時

田家即時用前韻

十月山中収獲物遅　看来民事想幽詩　多年阻隔田園
楽　不覚憑欄到暮時

やうやうすみなれぬれば、かしましかりし瀧の音も忘られて、

軒ちかき瀧のひゞも日を経れば
心をすます友とこそなれ

雲のかけわたしたるをみて、

眺めやる家路もいづら白雲の
我れや浮世の外にすむらん

神無月の十月あまり三日の朝、始めて時雨のいたくふりければ、

今朝はしも時雨のあめにそぼちつゝ
さすがに旅の憐をぞしる

題山館

林崖風色墜霜初　葉々黄紅錦不知　月照茅檐聞野鹿
雲生石竈煮渓魚　湯泉客散山光寂　蒼海鴻飛郷信疎
平昔空勞丘壑夢　仍疑睡著在吾廬

此夜風はげしく吹きおろして、舎りもゆするばかりなるを、さすがに高き山もとのしるしよと思ひ知りぬ。暁より風やみ、日あたたかにさし出たり。日数もやうやうかさなりぬれば、十四日のゆうべ近く此舎りを立出んとすとて、

今さらに名残ぞおしきあさよひに
なれて聞つる山の瀧つ瀬

ほそき道を傳ひて別府の里にくだりつきぬ。ゆある家にやどりて、曲浦の景色を見渡すに、月いと清かりければ、

雲迷ふみやまおろしの跡もなく
月澄みわたる濱の松原

あくればもちの日。もと来し道をたづねて夕暮に家に帰りぬ。此夜いたく更けて、鶴見の嶽を望みて、傾く月に対してよめる。

たれかまた瀧のやどりに眺むらん
行へゆかしき山の端の月

史料紹介

蝶斎起友 著

『温泉めぐ里』

佐藤 勉

この『温泉めぐ里』は別府市立図書館に所蔵されている古文書を再整理している時に出てきた物で、著者の蝶斎起友が別府温泉へ湯治に出かけた時の紀行文である。

蝶斎起友は、本姓は水之江、通称は弥五郎といい、豊前国宇佐郡封戸郷水崎村（現在の豊後高田市水崎）の庄屋であった。

父は弥八郎といい、金谷弗水の俳諧の門下生で、弗水より静斎の俳号を授かり、三世静斎月虚となった俳匠である。この静斎の号は弗水が日田の広瀬月化より授かった号である。

弥五郎は水之江弥八郎の弟子の佐々木鶴歩（四世静斎）に俳諧を学び、静斎の号を鶴歩より授かり、月虚の号を父の弥八郎から譲られ五世静斎月虚となった。